

(展示会)

シカゴで開催された「アジア学会」に参加して



シカゴで開催されたアジア学会展示会に出展して

オ・フン リサーチ センター 研究員 (国際関係部) 成 瀬 きよ子

シカゴは Windy City と呼ばれるだけあって、風は頗るさすような冷たさであった。

アジア学会(2009年3月26日・29日)の運営には、多勢のライブラリアン達が参加しているのに、彼らと交流を促したいと考えていた。シカゴ大学の奥泉さん、ミシガン大学の仁木さん、ハワイ大学のDazzellさんとは旧知の仲で楽しく会話することが出来た。5年前にミシガン大学でお会いした C. Hsu さんは、現在はバージニア大学の同僚で、「貴方をよく覚えていましたよ」と言われた。ハーバード大学の Katsumi さんは、展示会場に会い

に来てくれたが、往直のため外出していて残念ながらお話しが出来なかった。展示会は東亜同文書院関係の出版物と同慶中国学研究中心 (ICCS) の出版物を展示したが、トロント大学の Viren さん、Yale 大学の中村さんは、川井伸一教授が書いた英文図書に興味を持たれた。

シカゴ大学には 1 セット展示物を寄贈してきて、また多くの研究者から、東亜同文書院のデータベースに関心を寄せていただいたが、特に全英データベースの公開を熱望され、課題が与えられた。



アジア学会展示会・シカゴ大学講演会に参加して

言語研究支援課 山口 麗子

アメリカ・Sheraton Hotel Chicago で開催された「アジア学会」に参加し、東亜同文書院大学記念センターの史資料の公開と愛知大学広報活動を支援し、併せてシカゴ大学で講演会を開催した。

1月中旬にアジア学会・展示会およびシカゴ大学で講演会に出張することが決定した。役割は展示関係・スケジュール管理が割り当てられた。

Sheraton Hotel Chicago での展示ブースは、6MX25M のスペースに長机2脚、背面のカーテンには貼付不可との限られた情報を得て、展示空間する記念センター展示物の回廊、講演会パンフを各2000部印刷し、3・2発送期限に間に合わせる事ができた。尚院から愛大の歴史を紹介する展示は展示場所がないため、主な史資料をデー

タ化し、横断幕にプリントしてマイクスタンドと共に奥内持ち込み規定手荷物に納めた。また展示品を揃うため、既存のDVDの英語版を複製した。さらに愛知大学を紹介する英文パンフは新たにセンターで作成し待機した。

アジア学会参加団体のほとんどは書店関係であった。またシカゴ大学図書館で行われた講演会は、日本の書店関係・マスコミによる各社の最新情報提供の場であり、シカゴ大学関係者の講演出席者は述べ十数名であった。

海外での展示公開と講演会は初めての体験であり、また情報不足もあって展示関係で準備した程の成果は少なかったが、各参加書店の展示方法は参考になった。

シカゴで開催された「アジア学会」での展示を振り返って

東亜同文書院大学記念センター・ポストドクター 武井 義和

東亜同文書院大学記念センターのメンバーと、東亜同文書院大学出身の小崎昌義氏を合わせた合計8名のスタッフは、3月27日から29日正午までシカゴで開催された「アジア学会」の展示会場で、愛知大学の前身である東亜同文書院大学や、愛知大学が所蔵する稀文関係資料の紹介、記念センター発行の出版物の展示を行った。展示会場は地元アメリカをはじめ、中国、台湾、韓国、日本など世界各地の出版社が、自社刊行の東アジア関係書籍を展示・販売する場であったため、当初は

関心を示してもらえないか不安だったが、声をかけて呼び込みを行い、両社も積極的に致すように努めた結果、期間中130名ほどの方が立ち寄って下さり、中には色々質問する方もいた。アメリカ人への対応は、現地でアシスタントとして加わったシカゴ大の院長・ジョンさんが担当してくれた。これを機に、東亜同文書院大学や愛知大学についての理解と関心が世界に広がることを期待して止まない。



アジア学会展示会場



シカゴ大学



愛知大学ブース



シカゴの“路上高架電車”

大学史学専攻 四 稲一郎

初めてアメリカ合衆国に降り立った私を待ちうけていたものは、オヘア国際空港でタクシーに乗りこんでシカゴ市街地へ向かう途中に見た通勤電車であった。ハイウェイの中央に敷かれた線路を走り続けているその路線をしばしば見つ、ホテルに着いた私たちの目に飛びこんできたものは、空欄前の道路の真上にかかっているクラシックな鋼製高架橋であり、その上を先と何列の電車が轟音をあげて頻りに走っている姿には度肝を抜かれた。市電（高価電車）をそのままにあげたようなこ

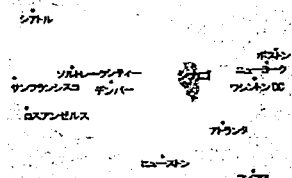
の路線は、実は古くから存在している“シカゴ名物”であることは後になって知ったが、この独特な電車には、5日目の午後に見えられた自由行動の時間に乗りこることができた。2日目の晩に懇話会場へ行くのに乗った地下鉄とやはり同型で、合わせて環状線を中心としたネットワークを形成しているその姿からは、シカゴでの都市交通は鉄道が健在であることを物語っていることがうかがえた。



シカゴの概況

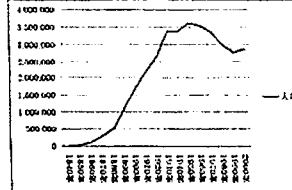
2009. 3. 17 高木

1、自然環境



シカゴはイリノイ州(州都スプリングフィールド市)最大の都市であり、五大湖のひとつであるミシガン湖の南西岸に位置する。緯度的には函館市とほぼ同じ位置にあり、ミシガン湖からの強い風にさらされる。ケッペンの気候区分では冷帯湿潤気候(Df-a)に属すが、夏と冬の気温差は大きく、大陸性気候の特徴を有する。

2、人文環境



1840年以降の人口は左図の通りであり、もともとこの地域にはネイティブ・アメリカンのイリニ族が住んでいたが、彼らは他地域へ強制移住させられた。その後、ミシガン湖とミシシッピ川を結ぶ運河が築かれると急速に都市が発展するようになった。19世紀末からは高層ビルの建設ラッシュに沸いた。内陸交通の要衝として、さらに万博の成功とともに国際的地位を高め、シカゴの経済は飛躍的に伸長したが、その一方で貧富の差や人種差別という社会問題を生み出した(注1)。ダウンタウンは暴動や腐敗政治などにより無法地帯と化した。1950~70年に市長を務めたデーリー氏の手腕により見事都市の再生が果たされた。その後、シカゴの地位はLAと交代して第3位となったが、世界の商業や金融の中心という地位は変わらない。

(注1)パーゼス(1925)の同心円モデルはシカゴ学派の学名が生み出した代表的な成果である

参考:wiki ほか

「アジア学会」参加のために訪れたシカゴについて

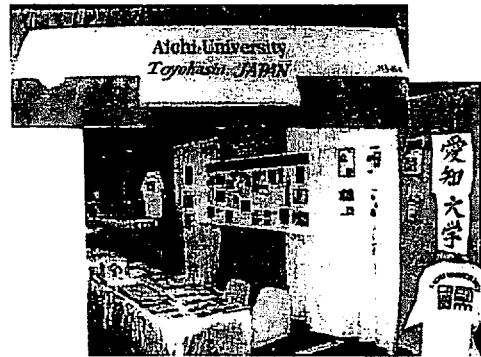
東亜研究センター 助教授 高木 秀 和

筆者は3月に開催された若手研究会で「シカゴの概況」と題して、シカゴの地理的・歴史的な背景を報告した。そのレジュメを作成するなかで、中学の社会科の授業で得た「シカゴ=食品工業で有名な都市」という知識しか持ち合わせていなかった筆者の頭の中に、少し具体的なイメージが湧いてきた。また、出発前には地図を見たり、インターネット上で公開されているシカゴの街景を見て、空間的なイメージを持つことができた。

しかし、空港に降り立ってからの自らの五感を駆使して感じるシカゴの街は、事前に学んだそれらとは大きく異なっていた。空港から都心に向かうタクシーの車窓から初めて眺めたシカゴの摩天楼群は想像以上の迫力をもって視界に飛び込んできた。都心に足を踏み入れれば「スクラップ・アンド・ビルド」をよとする日本の都市とは異なり、新しいビルと19~20世紀に建てられた古いビ

ルが混在している姿に感動すら覚えた。アメリカらしさ、といえ、レストランに出されるビッグサイズのメニューと、「人種のサラゲボウル」と例えられるように世界各地から人々が移り住んで来ていることを実感できた。中華街に一歩足を踏み入れれば、建物の外観、レストランから溢れる料理の臭い、小汚い路地...から、ここは中国ではないか、と錯覚してしまうほどであった。コンビニのレジに並んで振り回ってみると、彼らには様々な人種の人たちがいた。

アジア学会の会場はまさにそれを凝縮した感じであり、愛知大学のブースにも洋の東洋を問わず多くの人たちが訪れてくれた。出版社の出張が多いなかで展示中心という異色のブースであったが、東亜研究センターと愛知大学を世界に発信する、という所期の目標は多少なりとも達成できたといえるのではなかろうか。



シカゴ展示会

高木 秀 和

2009年3月26日~29日、アメリカのシカゴ市内のシェルトンホテルにて、「アジア学会」(AAS: The Association for Asian Studies)が開催された。同学会大会と同時に開かれたのは、各大学および出版社の出版物の展示会であった。当研究会センターも展示会に出展し、東亜研究センターの歴史や書院時代から続く愛知大学の中国研究を宣伝することができた。

一つ大きなテーマとなっている。同展示会において、世界中の有名な大学が集まり、それぞれの中国関係の出版物が展示された。展示された中国関係の出版物は実に多岐多様であり、各大学の中国研究の伝統と歴史が伝わってくる。

これらの大学と一緒に、本学の中国研究の歴史と伝統を世界に向けて発信あるいは宣伝できたことが、今回の「シカゴ展示会」の最大の成果だったと思う。

「アジア学会」とは、当然ながらその研究対象範囲がアジア全般であるが、その中で中国研究が

